

実務家教員による特別活動に関する授業実践の省察  
—教職大学院・教育学部における授業実践を通して—

森 美香 土屋 明子 土田 雄一  
(千葉大学教育学部附属教員養成開発センター)

Reflection on Classroom Practice on Extracurricular Activities by Practitioner Teachers  
“Through Classroom Practice at the Graduate School of Teacher Education and the Faculty of Education”

MORI Mika TSUCHIYA Akiko TSUCHIDA Yuichi

## 千葉大学教育実践研究

第26号 令和5年3月

**Research in Teaching Strategies and Learning Activities:**

**A Bulletin of the Center for Research and Development  
In Teacher Education Faculty of Education, Chiba University**

**No.26 March 2023**



# 実務家教員による特別活動に関する授業実践の省察 —教職大学院・教育学部における授業実践を通して—

森 美香 土屋 明子 土田 雄一

(千葉大学教育学部附属教員養成開発センター)

Reflection on Classroom Practice on Extracurricular Activities by Practitioner Teachers  
“Through Classroom Practice at the Graduate School of Teacher Education and the Faculty of Education”

MORI Mika TSUCHIYA Akiko TSUCHIDA Yuichi

本研究は、実務家教員が特別活動に関する授業を教職大学院と教育学部において担当することで、どのような意義があったかを明らかにするものである。教職大学院の授業実践により、学校現場での特別活動の実際はコロナ禍により変化し、これをきっかけに特別活動の目標を再確認して実践に取り組むことができたことがわかった。そして、教育学部の授業実践により、子供の頃に体験した学校行事は今となっても心に残っていることが明らかとなった。実務家教員が、学校現場での経験を基にその現状を教育学部での授業実践で取り扱うことで、特別活動の理論と実際をわかりやすく指導することに繋げられると考えた。そこで、今年度の授業分析やアンケート結果の分析を次年度授業計画にどのように生かすことができるかを考察する。

キーワード：特別活動 学校行事 教職大学院 実務家教員 コロナ禍

## 1 問題の所在と目的

文部科学省(2021)はコロナ禍において、学校行事を実施するための工夫として、「学校行事は子供たちの学校生活に潤いや、秩序と変化を与えたりするものであり、それぞれの行事の意義や必要性を確認しつつ、年間を通して実施する学校行事を検討することが重要となります。その上で、実施にあたっては、開催する時期、場所や時間、開催方法等について十分配慮することが考えられます。」と記している。このことから、コロナ禍においても学校行事が重要であることは明確である。しかし、現状はコロナ禍により、学校行事も大幅に変更される事態と

なったことは明らかである。また、学級活動で実施する話し合い活動をこれまでと同じように実施することが困難になった。「全国学力・学習状況調査 報告書」(2022)では、今年度初めて、「新型コロナウイルス感染症の影響」について調査している。調査対象の第5学年で、前年度(2021年)に学校教育活動をどのように実施したかを問うている。どの教育活動においてもコロナ禍以前と同様に実施した学校は少ない。しかし、内容や方法を変更して実施した学校が多くあることがわかった。特に「運動会等」や「集団宿泊活動」は90%以上実施しているが、「音楽発表会・合唱コンクール」、「芸術鑑賞会」は中止となった学校が多い(図1)。

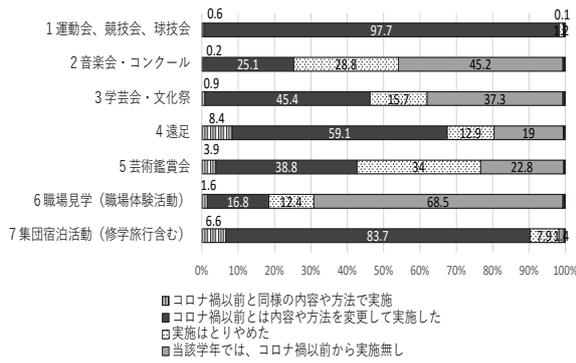


図1 新型コロナウイルス感染症の影響

2017年告示の「小学校学習指導要領解説 特別活動編」では、改訂の趣旨及び要点として、「各活動・学校行事において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につなげるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる」としている。そこで、特別活動の特質を踏まえ、これまでの目標を整理し、指導する上で重要な視点として「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つとして整理された。これにより、学校現場では、特別活動の意義や「なすことによって学ぶ」方法原理を十分理解し、上記の三つの視点を重視して指導することが期待されている。

また、2022年4月に国立教育政策研究所より特別活動の指導方法に関する動画資料「小学校特別活動映像資料」が配信された。これは、主に学級活動における授業実践について、教員にとっては指導方法がわかり、児童にとっては学習方法がわかりやすく示されたものである。この取組により、特別活動の実践の難しさや指導の充実の必要性を実感した。

このように激しく社会状況が変化する現代において、教員養成系大学で状況に合わせて実践的に指導する力の育成は重要である。学校現場経験のある実務家教員が指導を担当することで、実践的指導力を身に付けることができるカリキュラム編成を模索する。

下古立（2019）は、教職大学院の特別活動に関する授業について、現職教員学生にとって特別活動を深く考え直す機会という位置付けだと考えて実践したことで、授業を通して特別活動

に対する認識が深まったと述べた。

コロナ禍だからこそ、学校教育全体で行う特別活動に関する学びを深めていく必要がある。そのためには、教職大学院と教育学部で指導する実務家教員は、特別活動に関する理論と実践に関しての指導について検討すべきだと考える。

そこで、本研究は、実務家教員が特別活動に関する授業を教職大学院と教育学部において担当することの意義を見極め、今年度の授業の成果と課題を次年度授業計画にどのように生かすかを考察する。

## 2 方法

### (1)対象授業

本研究では、実務家教員が担当した特別活動に関する授業を三つ挙げ、授業の実際を分析し考察する。三つの授業とは、下記に示すとおり教職大学院における授業二つと教育学部で行った授業1つである。また、授業担当者は、研究家教員であり実務経験のある教員1人、人事交流により着任した実務家教員2人、学部授業についてはこの3人に加えて、非常勤講師（実務経験あり）1人が担当する。

#### ① 教職大学院「特別活動実践研究」

（第1ターム・8回・1単位）

【受講者】教職大学院院生及び既存大学院院生（15人）※現職教員9人

【期間】2022年4月14日～6月2日

#### ② 教職大学院「学校行事事例研究」

（第4ターム・8回・1単位）

【受講者】教職大学院院生及び既存大学院院生（9人）※現職教員6人

【期間】2022年10月6日～12月1日

#### ③ 教育学部「特別活動の理論と実際」

（第4・5ターム・各8回・1単位）

【受講者】教育学部生2～4年（404人）

【期間】2022年10月3日～1月30日

### (2)方法

①毎回の授業分析

②課題レポート分析

③学校行事に関するアンケート（無記名）の分析

### 3 授業計画

#### (1) 教職大学院「特別活動実践研究」

##### ①授業の目標と概要

###### 【目標】

講義や事例を基に、特別活動の実践について理解を深め、今後の特別活動の在り方を考えることを通して、児童生徒を対象として教員が援助・指導を行う際に、その意義を理解し、留意点を考慮した実践ができるようになることを目指す。

###### 【概要】

講義や事例検討や演習を通して学び、教育現場において特別活動に関わる教育活動を実践する際に、その意義や留意点について考察する。「学校における特別活動の役割」について講義や特別活動の事例（学級活動・生徒会活動等）検討を行う。また、受講者の特別活動を生かした実践事例の提案と検討を行う。これまでの学びと特別活動の国際比較を踏まえ、今後の特別活動の在り方を検討する。

##### ②授業計画

第1回	学校における特別活動の役割
第2回	学級活動・ホームルーム活動の実際と課題
第3回	児童会・生徒会活動の実際と課題
第4回	特別活動を活かした教科横断的な取組
第5回	特別活動（小学校）の実践 （キャリア教育他）
第6回	特別活動（中学校・高等学校）の実践（進路指導他） ※外部講師招聘
第7回	特別活動の国際比較と今後の特別活動の在り方について
第8回	まとめ

#### (2) 教職大学院「学校行事事例研究」

##### ①授業の目標と概要

###### 【目標】

学校行事について理解を深めることで、児童生徒及びその保護者を対象として教員が援助・指導を行う際に、その意義を理解し、留意点を考慮した実践ができるようになることを目指す。

###### 【概要】

講義や事例検討や演習を通して学び、教育現場において特別活動に関わる教育活動、特に学校行事を実践する際に、その意義や留意点について考察する。「学級づくりと学校行事の役割」

についての講義や学校行事を活用した学級作りの実践例や各教科と学校行事を組み合わせた横断的プログラムの実践例等について検討を行う。それらを通して、学校行事の抱える課題や評価の在り方について省察する。「コロナ禍」における行事の在り方について検討する。

##### ②授業計画

第1回	学級づくりと学校行事の意義と役割
第2回	儀式的行事を生かした教育実践例
第3回	文化的行事を生かした教育実践例
第4回	健康安全・体育的行事を生かした教育実践例
第5回	遠足・集団宿泊的行事を生かした教育実践例
第6回	勤労生産・奉仕的行事を生かした教育実践例
第7回	学校行事の抱える課題と評価についての省察（コロナ禍における学校行事の在り方）
第8回	まとめ

※第2回～第6回は受講生による事例提案を中心に授業を実践した。

#### (3) 教育学部「特別活動の理論と実際」

##### ①授業の目標と概要

###### 【目標】

特別活動の目標や内容及び教育課程全体への特別活動の位置付けを理解し、合意形成に向けた話し合い活動、意思決定につながる指導及び集団活動の意義を実践例で説明でき、学級活動の指導計画を立てることができる。そのための学級集団の理解に関する基礎的理論が理解できる。学校行事を活用した学級づくりや児童会活動・生徒会活動、クラブ活動の意義や課題が理解できる。指導要録等、特別活動の評価の在り方について理解できる。

###### 【概要】

特別活動の意義、学級集団の理解に関する基礎的理論を講義や討論を通して学ぶ。学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事、クラブ活動の意義や課題について事例解説や討論を通して学ぶ。それらの学びを活用して学級活動の指導計画を考える。

##### ②授業計画

第1回	特別活動の目標・内容・指導法 教育課程全体の中の位置付け
第2回	学級の課題発見と解決を目指した話し合い活動（合意形成と意思決定）

- 第3回 「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」と学級活動
- 第4回 児童会活動・生徒会活動と特別活動
- 第5回 似て非なるクラブ活動と部活動
- 第6回 家庭・地域住民や関係諸機関と連携した学校行事
- 第7回 特別活動の評価と改善
- 第8回 学級集団を理解するための基礎的理論

#### 4 授業の実際

##### (1) 教職大学院「特別活動実践研究」

下古立（2019）は、教職大学院での特別活動に関する講義において、経験、実績豊富な教員（受講生）でさえ、特別活動に対しての認識が十分でない状況が見て取れたと指摘している。また、文部科学省（2017）は、学習指導要領の改訂の趣旨として、各学校において、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかということが必ずしも意識されていないことを挙げている。

これにより、学びを深める手立てとして、毎授業において、始めに学習指導要領等の資料を提示し、理論的な学修を行ってから、各自の実践経験を振り返って協議する流れを授業の基本パターンとした。

##### 【第1回】

授業ガイダンスを行った。小・中・高学習指導要領を基に特別活動の目標や内容について理論的な内容を確認した。受講者にとって、特別活動の目標等基本的な内容を確認する機会となった（表1）。

表1 第1回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・特別活動の指導に対して反省する機会となった。特別活動の目標に対してそこまで意識していなかったことに改めて気づかされた。
- ・現職だが、「特別活動とは？」と聞かれるとパツとあまり出てこなかったのも、目的・目標をしつかり意識して取り組んでいきたいと思う。
- ・学級活動について、教員によってばらつきがあり、積み重ねや経験の差が大きい現状がある。

##### 【第2回】

学校で楽しかった出来事を振り返り、その多くが特別活動であることが受講者の経験から明らかになった。学級活動について、その目標と内容を確認し、A小学校での学級活動年間指導

計画を基に実践における課題について協議した。実態に即した学びができる一方で、形骸化している点が課題であることがわかった（表2）。

表2 第2回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・学級活動の学びのサイクルについて意識しているつもりであっても振り返りができていなかった。
- ・学校の思い出に残っているもののほとんどが特別活動だった。楽しいことはもちろん、ねらいをもって力をつけたい。
- ・特別活動は勉強すればするほど奥が深い。ただ現場では課題が山積みで何をどうしたら解消できるのか難しいと感じた。

##### 【第3回】

児童会・生徒会活動の実際について経験や各校の年間指導計画を振り返る。目標や育成すべき資質・能力を提示し、実際の活動における課題とその対応について協議した。教員と児童生徒が共に目標を共通理解することの重要性が明らかとなった（表3）。

表3 第3回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・意図的・計画的な指導が大切だと感じた。そのためにも教師と子供と共に目標の共通理解が必要であり、子供への評価もその目標に向かったものであることが重要である。
- ・活動について、自己評価、相互評価、教師からの評価等様々な角度から評価することが大切である。

##### 【第4回】

特別活動を生かした教科横断的な取組について、学習指導要領で示されている内容を基に学びの往還が重要であることを学んだ。よりよい教科横断的な取組を各グループで構想した。その際、児童生徒の実態把握と各教科の特質に合わせて関連させることが課題となった（表4）。

表4 第4回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・今後は実態把握、目標設定、実践、振り返り、次の行事へつなげることを意識したい。
- ・学級の現状について、感覚的なもので判断し道徳や特活を実施していた。
- ・意外と多くの教科を結び付けられることがわかった。活動ありきでなく、目指すものをはっきりさせることが大事であることが実感できた。

【第5回】

学習指導要領の改訂の肝となったキャリア教育（小学校）の内容やB市の取組の実際を紹介した。各グループでキャリア発達を促す特別活動を模索し、系統立てて指導することの重要性を実感した（表5）。

表5 第5回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・キャリア教育という職業に関することや進路指導についてはばかりを意識してしまっていた。
- ・キャリア教育の校種ごとの連携もしっかりと実施していかなければならないと思った。
- ・「キャリア教育が充実することで、学習意欲が高まる」という視点は新鮮で納得した。

【第6回】

中学校・高等学校における進路指導等の実践について、B市中学校の教頭先生を外部講師として招聘し、実践から見る課題について学んだ（表6）。

表6 第6回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・進路指導では、3年の進路選択だけでなく、1・2年で様々な生き方や職業を知り、自己理解を深めていく積み重ねが大切なのだと感じた。
- ・3年間を見通してゴールをつくることが大切である。
- ・振り返り活動や生き方を探求する大切さ等、小学校で応用できる部分をたくさん見つけることができた。

【第7回】

これまでの学びの振り返りと特別活動の国際比較から見える課題について協議した（表7）。

表7 第7回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・今までこんなに特活に向き合ったことはないと思った。振り返りの機会があって、学びの再確認ができた。
- ・日本の特別活動が海外から注目されているにもかかわらず、日本が一番特別活動に対する意識が低いことに驚いた。
- ・学んだことを実践するだけでなく、若年層の職員にこの学びを伝えていくことが責務であると考えた。

【第8回】

最終課題「学校現場で特別活動を実践する際、

どのようなことに留意するか、児童生徒にどのような力を育成するか例を挙げて記述しよう」に取り組んだ（表8）。

表8 最終課題の回答 下線部=筆者

- 学校現場で特別活動を実践するにあたり、以下の3点を意識して取り組みたい。（現職大学院生）
- ①活動の目的や意義を明確にし、同学年の教員や児童と共有しているか。
  - ②児童が自主的に活動できるように教員が働きかけているか。
  - ③振り返りの活動を通して、自己の成長を児童が感じられるようにしているか。
- 特別活動は日本の誇れる教育活動であり、子供たち自身にとっても学校生活の中でかけがえない思い出になるものである。特別活動のよさを十分に生かしながら学びをその場だけにとどめることなく、意思決定の練習を積み重ねる場として学校を機能させ、将来、どの子も社会でよりよく過ごしていけるよう指導を行っていきたい。（学部卒院生）

【考察】

第1回授業時には、現職大学院生から特別活動の目的等の意識が低かったとの反省が多く聞かれた。しかし、授業を重ねるごとに特別活動の各内容における目標や意義を熟知したうえで、その重要性を十分理解しこれまでの実践を振り返ることができた。また、その課題を見出し、今後の実践にどのように結びつけるかについても協議したことで、受講生の意識の変容がみられた。

本授業が、受講生にとって特別活動を深く見直す機会となったことは明らかである。理解の浅かった理論を学び、さらに具体的な事例を提示したり、課題解決の対応策についてグループ協議を行ったりしたことが有効だったと考えられる。

(2) 教職大学院「学校行事事例研究」

コロナ禍となり、学校の教育活動は大きく変わった。特に学校行事については、先述の通り（図1）、コロナ禍以前と同様に実施した学校は少なく、内容や方法を変更して実施した学校が多くある。実施内容や方法を変更することは、学校行事の意義や目的を改めて検討することが

不可欠となる。そこで、本授業では、学校行事の抱える課題や評価について、受講生の事例提案を基に省察し、コロナ禍における学校行事の在り方について検討する。

**【第1回】**

授業ガイダンスを行った。子供時代の学校生活の思い出を振り返り、その多くが学校行事であることがわかった。特別活動や学校行事の目標の理解を図るため、学習指導要領の内容を提示した。学級づくりをするうえで特別活動は欠かせない。とりわけ、学校行事がその核となることを確認した。

**【第2回】**

儀式的行事を生かした教育実践例を受講生が提案した。コロナ禍となり、儀式的行事の多くが簡素化され、オンラインでの実施が増えた。C中学校では、今年度行った参集での全校集会で、これまで伝統的に生徒が身に付けてきたマナーや立ち居振る舞いに課題が見られた。オンライン開催では「厳粛で清新な気分」を味わうことの難しさが浮き彫りとなった。

**【第3回】**

文化的行事を生かした教育実践例を受講生が提案した。D小学校では、学習活動の成果を発表する場を分散型授業参観に変更した。また、芸術鑑賞会の多くが中止となった。コロナ禍では、室内で実施されることが多い文化的行事は実施することが難しかった。しかし、文化的行事は児童生徒が互いの努力を認め合い、協力し、自他のよさを見つけ合うことのできる成長の場であることから、ねらいをよく理解したうえで実施について検討が必要との結論に至った。

**【第4回】**

健康安全・体育的行事を生かした教育実践例を受講生が提案した。E中学校では、体育祭等の大きな行事で、小集団作りから学級づくり、学年づくりと段階を経て実施に時間をかけて取り組む。また、特別活動だけでなく、体育や道徳等の他教科と連携することで目標の達成に至ることがわかった。また、協議によりコロナ禍では体育祭が縮小傾向で実施されたため、その準備や実践に関する生徒や教員の負担感は減ったこともわかった。

**【第5回】**

遠足（旅行）・集団宿泊的行事を生かした教育実践例を受講生が提案した。この行事については、コロナ禍であることから各教育委員会より実施の方向性が示された。制限がある中で何をどのように実施するかを各学校は児童生徒の実態と目的を見合わせて熟考した。F・G小学校でも感染対策を入念に行い、危機管理を徹底した。協議では、ねらいに即して成長を促すためには、児童生徒と教員が一緒に考えることも重要であると判明した。

**【第6回】**

勤労生産・奉仕的行事を生かした教育実践例を受講生が提案した。H小学校では、伝統的に地域住民や近隣小学校や中学校と連携して実施してきた環境学習のための行事が近年中止となっていることを報告した。午前中は地区清掃活動を行い、午後は中学校の校庭で保護者が作った地産地消のカレーを皆で食べ、さらにその後リクリエーションや防災体験等の合同活動が実施された。振り返ると活動ありきで勤労生産・奉仕的行事の意識は薄かったと課題が見えた。コロナの影響により、勤労生産・奉仕的行事の多くは中止となり、未だ実施されない行事が多い。中止になったことで行事の目的を改めて考える機会となった。

**【第7回】**

学校行事が抱える課題と評価について省察した。学校全体、教員と児童生徒の目的の共有が必須であり、目的に対する振り返りが重要であることや学校現場ではそれがおろそかになっていたことが協議で話題となった。

**【第8回】**

最終課題「本授業を通して学んだこと、次年度以降、学校行事を実際に行う際に留意したい点や改善したい点について、具体的な学校行事を挙げて述べましょう。」に取り組んだ。

表9 最終課題の回答 下線部＝筆者

○学校行事は、体験活動として児童生徒の心に残ることの多いものである。だからこそ、そのねらいを明確にして、良い思い出だけに留めず、より意味のあるものにしていきたい。(現職大学院生)

○行事の目的は何なのか。そしてそのためにはどのような手段を使うのかを意識して考え、実施し、その目的意識を踏まえた視点からの振り返りを丁寧に行うことで、行事の効果を子ども教員も実感することができる。また行事前の目的意識の共有、そして行事後の視点に沿った振り返りは次の学びにもつなげていくうえでとても重要である。(学部卒院生)

【各講義のリフレクション】

表10 各講義のリフレクション抽出語の傾向

回数	抽出語	学校行事	目標/目的	意識	感動	成長	コロナ
第1回	抽出語回数	24	8	3	2	2	2
第2回	抽出語回数	16	13	5	5	5	3
第3回	抽出語回数	25	7	7	6	5	3
第4回	抽出語回数	11	10	8	7	6	5
第5回	抽出語回数	13	13	9	8	6	5
第6回	抽出語回数	18	8	8	7	6	5
第7回	抽出語回数	32	22	9	7		

第1回から第7回までのリフレクションノートの抽出語は、各回の授業内容に依拠していることがわかる(表10)。学習テーマである「学校行事」や「儀式的行事」等は特に多く、学習テーマに沿った学びや振り返りができている。「目標/目的」という抽出語は毎時間リフレクションに書かれていた。これは、授業当初は特別活動の実践において、目標や意義を意識できていなかったという受講生の反省が色濃く表れていたことから、毎時間テーマが変わっても学校行事やその内容に関する目標や意義を考えながら授業に取り組んだことが推察される。また、「教育効果」「評価」「振り返り」「フィードバック」等の抽出語が多数あることから、特別活動の指導では、「なすことによって学ぶ」方法原理を重視し、さらに体験して学びを終えることがないように留意すべきとの考えがあったと思われる。

【考察】

本授業は、多くの行事がこれまで実施されていたが、コロナ禍が原因となりその多くが中止となったり、内容や方法が変更となった実態を理解したりする場となった。現職大学院生は他市町村と自校の取組の相違について考え、学部卒院生はコロナの影響を多分に受けた学校の現

状を目の当たりにすることになった。本授業が、行事の内容や実施方法を変更するために、目的を改めて見直し、中止となったことでこれまで行事が形骸化してきたことに気づく機会となった。

また、現職大学院生のリフレクションノートには、「この授業での学びを自分自身だけのものとせず、現場に還元し広げていくために次年度から積極的に情報発信を行っていきたい。」という学びの還元に触れる言葉が数人から挙げられた。教職大学院での学びを若手教員への指導や学校全体での共有に生かしていく意欲と情熱が感じられたことも、理論と実践の往還の一つの表れであると認識する。

(3)【教育学部】「特別活動の理論と実際」

迫田(2019)は「教育実習以外に教育現場での実務体験が少ない教職課程を履修している学生に対して、実務家教員が自身の実務を通して得た経験や実務家教員の視点で整理した情報を積極的に提供していくことが教職に対する理解を深めていくことにつながる」と指摘している。そこで、学生に特別活動の理論と実践についての理解を深められるように実務家教員が、学校での具体的な取組事例や情報を積極的に組み込む授業構成とした。

【第1回】

授業ガイダンスを行う。特別活動とはどのような教育活動か、教育課程上の位置付けと各教科等の関連について、基本的な理論を学習指導要領を基に学ぶ。これにより、学生たちがこれまで体験した特別活動と、学習指導要領に書かれた理論に隔たりを感じていることがわかった(表11)。

表11 第1回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- これまで考えていた特別活動とは、修学旅行や合唱コンクール等の行事をイメージしており、集団で何かを行うものであると思っていた。
- 他者との関わりの中で互いの良さや可能性を發揮できる時間にしたいと考えた。

【第2回】

学級活動の目標や内容を理解する。特に学級や学校における課題を見出して解決するために話し合い、合意形成、意思決定をする意義や指導法について学んだ。映像資料を活用し、学級

会の話合いの様子や指導法に着目して視聴し、その後役割分担をして模擬学級会を行い、合意形成と意思決定を体験した（表12）。

表12 第2回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・模擬学級会では、議題のねらいや目的に合わせて、意見を出し合い、一つにまとめることは少し難しいが、皆の意見に耳を傾けることの大切さを感じた。
- ・よりよい話合いを行うためには、お互いの意見を受け入れ、つながりを持たせながら意見を合体させることも大切であると学んだ。

### 【第3回】

特別活動において育成すべき資質・能力の三つの視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」について学ぶ。また、学生の小・中・高等学校時代の学校での思い出を振り返り、それらと上記の三つの視点との関連について考えた（表13）。

表13 第3回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・特別活動の全てが「人間関係形成、社会参画・自己実現」に関連していて、「なすことによって学ぶ」ことができ、活動のプロセスが大切であることを学んだ。
- ・授業の最初に行ったゲームは人間関係形成に深くかかわっていた。教員になったら4月の最初の学活で取り入れて人間関係づくりに活かしたい。

### 【第4回】

学習集団を理解するための基礎的理論について、メディア授業を行った。特別活動における学級経営の充実を図ることは学びに向かう集団の基礎を形成することを理解する。これにより、目指す学級集団の姿を実現するために意図的・計画的に取り組む事柄について模索した（表14）。

表14 第4回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・（レポート作成において）実際に学級担任になりきって学級集団をつくってみると、とても大変で児童・生徒の観察をしっかりと行い、クラスにあった支援をしていく必要があると思った。

### 【第5回】

児童会・生徒会活動について学ぶ。これまでの体験を振り返り、その意義や目標に関して学習指導要領を基に考えた。また、学びを生かして、学校に必要な委員会活動を構想する活動をグループごとに行い、協議を重ねた。実際に学校現場では一人1台タブレットの普及により、生徒会選挙も電子化し、委員会活動も変わってきている状況を知り、数年前の自己の経験との違いに関心を高めていた（表15）。

表15 第5回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・学級活動とは横（同学年）のつながりで、生徒会活動は縦（異年齢）のつながりという視点からとらえることも大切であることを学んだ。
- ・学年を超えて活動することで、人との関わり、社会との関わりを学ぶことができるため、子どもたちが積極的に活動できる環境をつくることが大切だと考えた。

### 【第6回】

小学校の特別活動に存在する「クラブ活動」について学んだ。中・高等学校には部活動は存在するが、それは教育課程外の活動であるから、特別活動ではない。クラブ活動と部活動の相違点や共通点を考えることで、クラブ活動の特徴の理解につながった（表16）。

表16 第6回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

- ・自分の興味関心のあるものを行うことにより、自己理解につながり、異年齢交流により人間関係や社会参画を学ぶことができる。クラブ活動の重要性を学んだ。
- ・児童のニーズと指導教員や外部指導者不足や時数不足により活動できない現状を知り、解決を考えたい。

### 【第7回】

学生生活において、印象深い学校行事とは、その目標や内容によって、五つに分類できることを学んだ。学生に小・中・高等学校において思い出に残っている学校行事について調査を行った。思い出深い学校行事がどのような学習過程で実践されていたか、どのような力の育成につながっていたかを経験を振り返りながら考えた（表17）。

表17 第7回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

・行事が分類され、それぞれが目的や付けたい力が明確になっていて、教員の立場で行事を考えてみると今までとは違った面を学べたと思う。  
 ・教師になった際には、行事ごとの目標をしっかりと把握し、指導していきけるようにしたい。

**【第8回】**

特別活動の評価は数値で行わず、児童生徒の努力や意欲等を積極的に認め、よさを評価することを学び、本授業のまとめとした。最終課題「特別活動の内容から一つ活動を選び、ねらいと達成するための手立てや配慮等について記述しなさい。」に取り組んだ（表18）。

表18 第8回授業受講者の振り返り 下線部=筆者

・活動の結果だけでなく、その過程における児童の努力や意欲に目を向けることが大切であることを学んだ。  
 ・教師は活動を通して何を学ばせたいのか、その意義を考えて活動に取り組むことの重要性を感じた。

**〔考察〕**

特別活動の特質から、人間関係形成、「なすことによって学ぶ」体験、協議を重視した授業構成とした。毎授業の導入では人間関係づくりの構成的グループエンカウンター等を取り入れ、協議しやすい雰囲気づくりに努めた。

「令和4年度全国学力・学習状況調査 質問紙調査」の学校質問紙調査では、「調査対象学年の児童生徒に対して、学級生活をよりよくするために、学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法等を合意形成できるように指導を行っていますか」の問いに対して、90%以上が肯定的に回答している。「児童生徒が意思決定できるような指導」についても同様の回答がみられる。このことから学級活動において、合意形成や意思決定は大変重視される場所である。しかし、学生に合意形成や意思決定に関する授業を実践するとこれまでの体験が少なかったり、これらが学級会で意図的に実践されていたことに驚いたりする学生も多かった。そこで、教育学部における特別

活動に関する授業では、学級活動で合意形成と意思決定についての内容を体験的に取り入れることが重要であるといえる。

また、特別活動の基礎的理論を学びながらこれまでの体験を振り返り、どのような学びがあったかを考えたり、教員であればどのような活動に取り組むか等を検討したりした。体験の想起や具体例を示し、新たな活動の模索を取り入れることは、学生が自分が教員になったらとイメージしながら授業に取り組む姿が見られ有効だった。

**5 学校行事に関するアンケートの分析**

**(1)対象者**

①教育学部生：343人

- ・「特別活動の理論と実際」を受講した教育学部404人（うち342人回答）：1年生5人、2年生327人、3年生8人、4年生2人
- ・教職大学院在籍の学部卒院生1人

②学校教員・教育行政職員：56人

- ・教員経験10年以下：7人
- ・教員経験11年～20未満：41人
- ・教員経験20年以上：8人

**(2)期間**

①教育学部学生：2022年10月、12月

②現職教員等：2022年10月、11月

**(3)アンケートの内容について**

①目的

本アンケートは学校生活における思い出を調査し、特別活動との関連を分析するために実施した。なお、教員にも特別活動に関するアンケート調査を行うことで、特別活動の実践における意識を分析する。本調査項目は、下古立（2019）を参考に作成した。

②項目

**〔教育学部生対象アンケート項目〕**

- ア 子供のころ、学校生活で1番思い出に残っている事柄は何ですか。それはいつのことですか。
- イ 子供のころ、学校生活で2番めに思い出に残っている事柄は何ですか。それはいつのことですか。
- ウ 子供のころ、学校生活で3番めに思い出に残っている事柄は何ですか。それはいつのことですか。

- エ これまで経験した学校行事（部活動は除く）の中で、自分の生き方（考え・行動・人間関係等）に影響を及ぼした事柄はありますか。いつどのような行事か。
- オ これまで経験した学校行事（部活動は除く）の中で、よくない思い出として心に残っている行事はありますか。いつどのような行事か。理由も教えてください。
- ※オは前半授業での学生の感想より、新たに項目を追加調査実施

〔現教員等対象アンケート項目〕

- ア 子供のころ、学校生活で1番思い出に残っている事柄は何ですか。それはいつのことですか。
- イ 子供のころ、学校生活で2番めに思い出に残っている事柄は何ですか。それはいつのことですか。
- ウ 子供のころ、学校生活で3番めに思い出に残っている事柄は何ですか。それはいつのことですか。
- エ これまで経験した学校行事（部活動は除く）の中で、自分の生き方（考え・行動・人間関係等）に影響を及ぼした事柄はありますか。いつどのような行事か。
- オ 教員として思い出に残っている学校行事は何か。
- カ 教員として力を入れている学校行事は何か。

(4)アンケート結果

①学校生活の思い出

学校生活で思い出に残っていることは、学生によると修学旅行と部活動が同程度多いことがわかる（表19）。

表19 学校生活の思い出

N = 342

修学旅行	部活動	文化祭・学園祭	運動会・体育祭	合唱コンクール	林間学校	卒業式	球技大会	児童会・生徒会	マラソン大会
27.7%	25.7%	12.5%	10.8%	5.0%	3.8%	2.0%	1.7%	1.5%	1.2%

また、上位10位には、八つの学校行事が入っている。また、9位の「児童会・生徒会」も特別活動の内容である。このことから、特別活動、特に学校行事は学校生活において大きな印象を残すことが明らかとなった。それは、体験活動を重視することで印象に残りやすく、また活動だけでなく人間関係を深める特別活動の特質からも推察できる。

さらに、「学校行事の中で、自分の生き方（考

え・行動・人間関係等）に影響を及ぼした事柄がある」と67.8%の学生が回答している。また、人生に影響を与えた学校行事があると回答した記述の内容を分析した。修学旅行等、文化祭、運動会・体育祭、合唱コンクール等の集団活動が中心となる行事が多く選ばれている（表20）。回答の記述内容には、これらの学校行事から人生に与えた影響を特別活動を指導する上で重要な視点として整理された「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点で分類した（表21・22）。学校行事は体験から「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」に関する学びを得て、その後、考えや行動において新たな変化を生んだと解釈できる（表22・23）。学習過程においてもこの三つの視点は重要な意味を持ち、特別活動の方法原理「なすことによって学ぶ」を体現していると考ええる。

表20 人生に影響を与えた主な学校行事

※複数回答 N = 197

修学旅行等	文化祭	運動会・体育祭	合唱コンクール	マラソン大会	卒業式
52人	50人	37人	31人	5人	5人

表21 人生に影響を与えた理由の抽出語

※複数回答 N = 197

協力	協調	達成感	人間関係	仲間	友達	自分
30	7	8	15	10	11	42

表22 人生に影響を与えた事柄と三つの視点の関連

※複数回答 N = 197

人間関係形成	社会参画	自己実現
86	28	31

表23より、集団活動において、友達関係や集団としての課題を見出し、それを乗り越えた経験をすることや積極的な考えや行動をすることで、「人間関係形成」や「社会参画」に関わる学びを得られたと推察する。「自己実現」に関しては、集団活動の有無に関わらず、自己理解を深めたり、自己の課題克服に向けた努力をしたりすることによって、人生に影響があったと感じていることがわかる。

表23 人生に影響を与えたエピソード

視点別文例		N = 197
人間関係	高校の文化祭で今までクラス行事に協力しようと思ったことがなかったが、クラス劇の指揮を任せられ、人と関わり意思の疎通のためにコミュニケーションをとる重要性を知り、自分から動くことができるようになりました。	中3の合唱祭。賞は取れたけど、褒められていたのは他のクラスで、担任もあまりクラスに関心がないタイプだったので、やりきった感覚があまりなかった
形成	中学校の合唱コンクールで人間関係が練習中は悪くなり、本番終わったら仲が深まったと感じる。ぶつかりあってこそ、仲が深まると思った。伴奏者として3年間参加し、準備の重要性を実感した。	学級レクで、担任の先生を交えて夏休みの思い出を話す時間があったが、私を含めた大人しい児童の話にはコメントせず、クラスの中心的な児童の話にのみコメントし、さらに会話を広げていた印象が残っている。コメントがもらえなくて悲しかったという思い出として心に残っている。
社会参画	高校の文化祭。クラスで劇を企画した際に、今まではあまり積極的に行事に参加するタイプではなかったが、この経験を通してクラスに参加することの大切さを知り、積極的に活動に参加するようになった。	高校でのマラソン大会です。私自身苦手なわけではないが、制限時間を設けて、それまでに帰って来られなかったらもう一度走るという決まりが、好ましくなかったから。
自己実現	中学生の合唱コンクール伴奏者として自由曲の練習をした。全く弾けなかったが、夏休みにコツコツ練習して徐々に弾けるようになった。その経験で、諦めずに日々努力すればどんなことでも成し遂げられると学んだ。	沖縄の修学旅行だったが、直前に首里城が燃えたりして、やたらと何もしない暇時間が長くて苛ついた。
	中学校での卒業式で担任がおっしゃっていた言葉で、改めて自分が教員になったという気持ちが強くなった。	中学校3年間毎年あった行事でした。マラソンが好きではなかったので毎年嫌々練習していた。
	私は運動が苦手なのですが、マラソン大会や夜間歩行、山登りなどの学校行事を通じて、完走したりやりきった時、諦めずに頑張る重要性ややれば出来るという自分への自信に繋がりました。	中学校の体育祭。その理由は運動があまり得意ではないから。

しかし、学生が経験した学校行事はよい思い出や人生へのよい影響ばかりではないことも本アンケートから読み取ることができた(表24)。54% (87人) の学生が学校行事等の特別活動でよくない思い出として心に残っていることがあると回答している。

表24 よくない思い出として心に残っている学校行事

N = 161								
マラソン大会	修学旅行	合唱コンクール	運動会・体育祭	林間学校	遠足	卒業式	陸上大会	文化祭
23	15	14	6	5	2	2	2	2

よくない思い出となった理由を分析したところ、児童生徒の人間関係の悪化や運動に関する行事等が苦手との理由があることがわかった(表25)。具体的には、学校行事の活動自体やその学習過程において、人間関係が悪くなったことやいじめにつながる事案があったことが挙げられた。また、教員の関わりについて不安や不快な思いをしたとの意見も見受けられた(表26)。

表25 学校行事がよくない思い出となった主な理由の分類

N = 80			
子供同士の関係性	苦手・嫌い	教師の関わり	プログラムの構成
30	20	6	4

表26 学校行事がよくない思い出となった主な理由

N = 80	
子供同士の関係性	子供2年生グループ決めの段階で上手くいかず揉めて、行ってからもグループ同士の喧嘩が勃発し、空気が少し悪かったから。
中学校で、合唱コンの練習が原因でいじめのような事が起きてしまったから。	

教師の関わり	中3の合唱祭。賞は取れたけど、褒められていたのは他のクラスで、担任もあまりクラスに関心がないタイプだったので、やりきった感覚があまりなかった
プログラムの構成	高校でのマラソン大会です。私自身苦手なわけではないが、制限時間を設けて、それまでに帰って来られなかったらもう一度走るという決まりが、好ましくなかったから。
苦手・嫌い	中学校3年間毎年あった行事でした。マラソンが好きではなかったので毎年嫌々練習していた。
	中学校の体育祭。その理由は運動があまり得意ではないから。

ここまで、学生に特別活動に関する印象や経験の調査結果について、分析を重ねてきた。続いて、教員の特別活動の指導について調査した。教員として力を入れる学校行事は何かを調査したところ、「卒業式」や「送る会」等の卒業に関する行事、「運動会・体育祭」、「修学旅行」や「林間学校」等の学校外で行い、宿泊を伴う行事に注力していることが明らかとなった(表27)。その理由として、「子供の成長」、「子供の活躍」、子供が「成就感・達成感」を得る学校行事であることが挙げられる。また、学校行事が「学級経営」、「学年経営」に生かされることを見据えて、児童生徒の人間関係づくりを重視して取り組んでいることがわかる(表28)。

表27 教員として力を入れている主な学校行事

N = 56								
卒業式	運動会・体育祭	修学旅行	送る会	児童会・生徒会	学級レク	合唱コンクール	林間学校	学校行事全体
14	11	4	4	4	4	3	2	4

表28 教員として力を入れている主な理由

N = 56					
子供の成長	学級経営	集大成	学年経営	子供の活躍	成就感・達成感
15	12	8	7	6	5

【考察】

アンケート結果より、特別活動はよい思い出として心に残ることは多く、また、その後の人生に影響を与えることがわかった。しかし、特別活動、特に学校行事はよい思い出にもなり得るがマイナスイメージを持つものになる可能性も大いにあることがわかった。学校行事は学級を超えて、学年で実践したり、学校全体で行ったりすることも多い。集団の規模が大きくなる

ことで、教員は児童生徒の役割や活躍の場を事前に計画・準備をすることが、児童生徒の達成感や達成感となり、成長につながる。そのために基盤となる学級経営や人間関係の構築に十分配慮して指導することが重要となるだろう。そこで、教員は児童生徒にマイナスイメージを与えうる学校行事があることを肝に銘じ、学校行事やプログラムの開発、指導の留意点等を見直していく必要がある。

学生にとって心に残る行事と教員が力を入れて実践した行事に相違が見られた。学生は集団活動で人間関係や社会参画を経験する行事を心に残る行事としているが、教員が最も力を入れている行事は「卒業式」であったことは大変興味深い。どの学校行事も違った目的があり、達成に向けた手立てを関係教員で共有して協働し、さらに児童生徒とも行事の目的を共有することが重要である。よって、教職大学院と教育学部の特別活動に関する授業では、上述を重点的に扱うべきだと考える。

## 6 まとめ

「教職大学院の教員組織編制等に関する留意事項について」（平成27年1月14日付事務連絡）では、「教職大学院の専任教員が学部教育に参画することにより、教職大学院の教育と学部教育に関係を持たせることは有意義であると考えられる。」としている。このことから学校現場の経験を持つ実務家教員が特別活動の授業を担当することで、実践的指導力を育成する教員養成カリキュラムの開発において理論と実践の融合を目指すことが期待されている。次年度も教職大学院と教育学部において、実務家教員による特別活動の授業を予定している。そこで、今後の授業計画において以下の点に留意して進めていく必要がある。

- ・教職大学院・教育学部において実施した特別活動のどの授業でも、「なすことによって学ぶ」という方法原理を重視し、授業構成を工夫する。導入では、仲間づくりを促進できるように構成的グループエンカウンター的活動を取り入れる。また、習得した知識や経験を基に学び合うことができるようにグループ協議を積極的に設定する。
- ・次年度の教職大学院における特別活動に関する二つの授業において、学生のアンケート結果を提示し、その分析を行い、よりよい集団活動の構築を模索する場を設けるようにしたい。特に特別活動に対してよくない思い出が

あると回答した学生の記述回答を多角的に考察する。

- ・教職大学院において、学生の授業で得られたアンケート結果やリフレクションノートの記述やエピソードを分析する。児童生徒の学びにつながり、人間関係形成や社会参画・自己実現につながる特別活動のプログラム開発に取り組むことは現職大学院生にとって、児童生徒の思いを知る機会となり、さらにより学びの機会となるだろう。
- ・教職大学院で特別活動に関する授業を行うことは、その教科の特質からも学校全体に関わる内容が多いことから、大変意義があると考ええる。そこで、教職大学院において理論を学び、それを踏まえた上で実践を振り返り、見出された課題やその解決方法を学部授業で取り上げる。理論と実際の教育活動の具体例を基に学ぶことで理解が深まるが、学校現場での課題を知ることは更なる学びとなるだろう。

## 【引用参考文献】

- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」
- 文部科学省（2021）「学校行事に関すること Q&A」総合教育会議資料
- 国立教育政策研究所（2022）「小学校特別活動映像資料 学級活動編」  
[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidouusiryou/sho\\_tokkatsueizo/index.html](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidouusiryou/sho_tokkatsueizo/index.html)
- 文部科学省（2022）「全国学力・学習状況調査報告書」
- 文部科学省（2015）「教職大学院の教員組織編制等に関する留意事項について」事務連絡
- 保坂亨 伏見陽児 笠井孝久 佐瀬一生（2017）「教員養成における交流人事教員と実務家教員の役割」千葉大学教育学部附属教員養成開発センター
- 迫田孝志（2019）「実務家教員による情報提供が教職理解に及ぼす影響：特別活動の実践を通して」（鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要）
- 下古立浩（2019）「教職大学院における特別活動に視点を当てた講義報告：選択科目『特別活動の理論と実践』の実践」（鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要）
- 樋渡美千代 森田智幸（2017）「教職大学院における実務家教員の役割—『実践の中の理論』に焦点をあてて—」（山形大学大学院教育実践研究科年報）



